
目と耳を塞がれて

電式

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

目と耳を塞がれて

【Nコード】

N5413BA

【作者名】

電式

【あらすじ】

一瞬の出来事だった。

今日は残業のお陰で、僕が退社したのは夜八時を過ぎてからだ。定期的を訪れる残業シーズンも、最初こそ仕事の多さに腰を抜かしたもののけど、今年で入社12年目。今の僕にとってはもう慣れっこだった。

大学を卒業したての頃は、小さい頃からラグビーをやっていたこともあって、体力は腐るほどあった。老いと老化なんて、僕には来るはずがないと思っていたけど、現実はその甘くはない。残業に腰を抜かしつつも体力任せでこなしていたあの頃のほうが、今より楽だったような気がする。いや、楽だった。

「家に着くのは九時か……」

会社を出てすぐの駅。ポケットの定期券を探して手を取り出したと同時に腕時計を見て、ため息。世の中の効率化という名の催眠術は、知らず知らずの間に僕自身の動きも効率化していた。そういえば、入社したての僕はことあるごとに「非効率だ」って怒られてたっけ。なんだかちよつと懐かしい。

階段を伝ってホームに上がり、自分の乗車定位置に並んだ。

僕のマイブームは、スマートフォンだ。最初、僕はスマートフォンになんかに興味はなかった。ところが、会社から仕事用に配布されたスマートフォンを触ったところ、これが意外に楽しい。仕事用

とは別に、プライベート用のスマートフォンを衝動買いしてしまっただけだ。だから僕のカバンには今、そういう理由でスマートフォンが2つ入っている。40歳までのカウントダウンが迫ってきているというのに、僕は未だに独身。自分の好きなようにお金を使えることを捨てられなかったのが結婚しなかった理由だ。両親が元気なうちにお嫁さん探さなくちゃ。

通勤片道1時間のうち電車が40分、徒歩が25分。こう書くと家は駅からちよつと遠いかなって感じがするけれど、その時間の大半は信号待ちに費やされていて、距離的には案外近かったりする。

電車に乗ってすぐに始まる席取り合戦。僕は座席をゲット出来なかった。ドアにもたれかかって、カバンから私物のスマートフォンを取り出し、イヤホンをつけた。スマートフォンで音楽でも聞きながら、昨日インターネットで試しに買ってみた電子書籍でも読もうと思ったのだ。

400ページ以上にも渡る長編SF小説が、自分の手の中にすっぽり収まっているのはちよつと不思議な感覚。これから電子書籍を買うなら、こつちのほうがいいかとさばらなくて済む。家にある本棚も電子書籍化してみようかな。いわゆる「自炊」ってやつ。

この小説、自分が思ってたよりも面白い。どんどん作品に吸い込まれていく。危うく自分の降りる駅を乗り過ぎてしまいそうだった。自分が聞いている音楽がちょうど作風にピッタリで、相乗効果が出ているのかもしれない。僕は改札を出て僕の家と同じ方角に向かう人の後ろについて、作品の続きを読む。それは一度読み出したら止まらない。電池切れの心配のない紙媒体の方も買ってみようか……って、それじゃあさつきと言ってることと真逆だよ。はは、どっちも一長一短だ。

一瞬、スマートフォンの画面が見えなくなるぐらい明るい光が、僕の視界を包んだ。その次の瞬間には僕の視界は完全にブレてしまっていた。一体何が起きたんだろう？

僕の網膜は深青色のキャンバスに散らばる、藍色の綿の欠片ようなものを捉えた。僕はそれが何か分からないまま、理解する余裕もないまま、不明な出来事に流されているだけだった。僕は本能的に強く目をつぶった。

後頭部が硬いものに激しくぶつかる音がして、舌を噛んだ。自分の身体がどうなっているのかはまだ分からない。ただひとつ分かるのは、僕の身体は自分ではどうにもならない力でもみくちゃにされているということだけだ。

頭をぶつけるのは一度だけじゃなかった。何度も何度も、いたるところをぶつけた。僕はこの時になって初めて、危険な目に遭っているということを認識できたのだ。

ゴス、これまでで一番大きな音が頭に響いた。もう僕の中では時間感覚は分からない。少しして、自分は今静止しているということが認識できた。次に訪れたのは、全身の重く、刺すような痛みだった。

「大丈夫ですか！」

男の人の叫びに似た声がした。僕は何も考える事ができないまま、目を開けようとした。さっきまでは普通に開いていた目が、思うよ

うに動かない。結局僕は薄目でその人を見るしかなかった。その人の背後に深青色の空が見える。僕は仰向けになっているのか。

「す、すぐに救急車を呼びますから！」

その人は僕の顔を見るなりそう言って電話をかけ始めた。思うように動かなくなってしまった自分の体で、何が起きたのか必死に情報を集める。僕は交差点の隅にいた。僕の家のおすぐ近くだった。道路の中央で道を塞ぐようにして不自然に止まっているセダン車。運転席のドアは開け放たれたままになっていた。僕は事故にあったのではないだろうか。そんなまさか。

そうだ。僕のカバンは一体どこにあるんだろう。荷物を手探りで探し始めると、近くでまた別の男性の声がした。

「動かないで！ 救急車が来るまでそのままじっとしててください！」

救急車なんて知らない。少しすれば痛みも引いて立てるようになる。その人は僕と同じスーツ姿だった。僕より若い。彼はネクタイを外し始め、それを僕の左足に巻きつけ始めた。そのあまりの痛さに僕はうめき声を上げてしまった。

「すみません！ 誰かネクタイを貸してください！ 出血がひどいです！」

いつの間にか、僕の周りに人が集まっていた。彼はその人達に呼びかけたのだ。本当に大丈夫だから……そう言いたかった。でも僕の喉からは低いうめき声しか出なかった。

一人がネクタイを外しだした。自分の身体がどうなっているのか、体がうまく動かないせいで確認できない。答えはすぐそこにあるのに、見れない自分がかしかった。

少し気分が悪くなってきたと思ってまもなく、強烈な吐き気が僕を襲った。息苦しさを感じて自然と呼吸が早くなってくる。大した運動もしていないのに心臓がバクバクする。吐けるならこの場で吐いてスッキリしたかった。数人の男性がネクタイや上着を取り出して、僕の腕や足にそれを巻き付けていた。

遠くから救急車のサイレンが聞こえてきた。僕は右腕にできたらしい傷口を自分のネクタイで縛ってくれている、50代の見知らぬおじさんが僕の顔から一番近いところにいた。

「もうすぐ救急車が来る！ 死ぬんじゃないぞ！ 絶対死ぬんじゃないぞ！」

救急車はもうすぐそこまで来ていた。こんな僕の為にわざわざ私物を投げ出してくれたみんなに、ちゃんとお礼言わなきゃ……

「どうしたー！」

彼は僕が手を動かしたのに気づいてくれた。言葉にならない声でも、伝えないと。もう、うめき声すら出てこなかった。それでも僕は大きく、でも小さく、彼に分かるように口を動かした。

「礼は助かってから言えバカ野郎！」

その時、あの人が呼んでくれた救急車が僕の目の前に止まった。中から隊員が数人飛び出して、僕を担架の上に乗せた。救急車に運び込まれた僕。その後から隊員が乗り込んだ。少し遅れて救急車に飛び乗った隊員がいた。

「彼の私物だそうです！」

その隊員の手には、ボロボロになった僕のカバンがあった。画面が粉々になって、原型を留めていない僕のスマートフォンも。

「。。。さん、大丈夫ですか？」

走りだした救急車の中で隊員の一人が僕の名前を呼んだ。僕は息をするので精一杯になっていた。どんどん視界が黒で染められ狭くなっていく。目は開いているはずなのに、名前を呼ぶ隊員の姿が見えない。ポーという耳鳴りがした。救急車のサイレンと進路を開け

ろと怒鳴る声が、隊員の僕を呼ぶ声が、遠くに消えていく。父さん、母さん……ごめん。

——僕の凶器は、スマートフォンだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5413ba/>

目と耳を塞がれて

2012年1月14日22時53分発行